

「エルモの夢」

総園長 宮下 智

「パチンコ！パチンコ！」、彼女のけたたましく大きな叫び声が建物中に響き渡った。鬼の形相である。帰省中に実家でこんなパニックが起これば、金魚の水槽をひっくり返すほどの力を発揮するらしい。父、母曰く「E子の火事場の馬鹿力には本当にびっくりだよ」と。

「パチンコ！」と大声が出ることには理由がある。父も母も趣味はパチンコ、したがって帰省中の多くの時間は昔からパチンコ屋で過ごすのが当たり前だった。そして、父や母のイメージはそのままパチンコ屋とつながった。加えて、もう一つ彼女には大事な発語がある。それは「バス！」、こちらも父や母とイメージが重なり、さらに「お家」とイメージが重なっている。車の免許を持たないご両親は、常に高速バスでの帰省の送迎をしていて、おそらく「お家に帰るよ」が「バス！」であり、「パチンコ」も「バス」も、父や母と会えるという「快感情」と結びついているから、穏やかに「パチンコ」「バス」と繰り返す時には、彼女が嬉しかったり、楽しかったりしたときに、「楽しいよ」「嬉しいよ」「好きだよ」の気持ちを伝えるために使用されていたら違いないと思う。

そんな彼女、父や母のご存命中のできごとだが、父や母と会うと必ず嘔吐した。大量の嘔吐である。マライオンの如きの噴き出し方で、母が声をかければかけるほど吐いた。

せつかくの来園時に吐くので、母も対応に大わらわである。言葉もきつくなる。「そんなに吐くんだったら、お母さんはもう来ないよ！」…また嘔吐である。

お母さまにはこんなお願いをした。「お母さまのことが嫌いで吐いているのではないんですよ。また吐いたらどうしよう、どうしよう困っているうちにまた吐いちゃうんです。そして、ああ吐いちゃった、ああ、嫌われるどうしよう、で、また吐いちゃうんです。」「だから、吐いちゃったときには、慌てないでいただいて、後始末は支援職員がしますから、お母さまは、お母さんが来るのを待っていたんだよね、お母さんも会いたかったんだよ、E子のこと、大好きだよと言ってあげてくださいね。」と。

彼女は、外出中、楽しそうに家族団欒を過ごしている家族を見ても吐いたが、父が亡くなる前に父の膝に自分から入ることができるようになり、母が亡くなる前には、母と嘔吐なしで面会ができるようになって、ほぼほぼ父子関係、母子関係間のアンビバレンツで吐くようなことが無くなったのだった。

【解説】

E子さんは、お母さまに対して、二つの気持ちを抱いて、心が葛藤状態にあります。私は、お母さまに好かれているのだろうか、ひょっとしたら嫌われているのだろうか、この二つの気持ちの間で心は揺れに揺れているのです。だって、「吐いたら会いに来てくれない」ということは、嫌われているってこと？ということ？です。このような二つの気持ちが戦っている心の状態をアンビバレンツ（両価性）と言います。お母さまはE子さんのことを嫌いであるはずありませんから、コミュニケーションの方法は、もっぱら嫌いと思わせるような言葉を避けて、好きに違いないと思わせるような言葉だけを伝えることです。これでアンビバレンツの状況を脱していけるはずですよ。



さらに彼女には強い身体の緊張があった。まずは、居室の布団の上で寝ることができない。廊下で横になっても、頭が床につけることができない。頭だけが、いつも45度の高さで、持ち上がっているのである。睡眠中もその頭は落ちることがないのである。そして、布団をかけることができない。どんなに軽い毛布やタオルケットのようなものでも、かけた途端に目を覚まして起き上がり、深夜であっても移動し始めてしまうのである。

父や母のご存命中、彼女は帰省中には、川の字でベッドの上に布団をかけて寝ていたというから、明らかに学園での様子は、寂しさの反映であることが推測できる。

そんな寂しさの証拠は他にもある。彼女の身体は、もともと左に傾いているのだが、寂しくなると左側にさらに傾く。そこで心のエネルギー注入だ。彼女の故郷の味であるブドウを食べれば、ポパイのほうれん草の如く、また、身体が元の位置に戻るのだ。

お父さまの胡坐の中にスルスルと入った良い経験があるのだろう。私が事務室でパソコンを打っていれば、よく事務室に入って来て、私の膝の上にちょこんと座った。それでも彼女の上半身はカチカチに緊張

して、決して私の身体に上半身を預けてゆったりと座ることができなかった。

【解説】

この身体の緊張は、動作法的に解釈すると、「身体の緊張＝心の緊張」と理解できます。なにかうまく伝わっていないことがある、意思決定支援が不十分なことがある、他者に依存する（甘える）ということができる状況の反映であると理解することができます。とはいえ、どうすれば身体が緩むのかというと、これは暗中模索で、実践の中にしか答えがないのです。「身体の弛緩」⇒「心の弛緩」という支援方法もあれば、「心の弛緩」⇒「身体の弛緩」という支援方法もあります。また、ニワトリか卵かの話なのですが、「身体の弛緩」と「心の弛緩」が相互に影響しあう支援方法も有ります。



それから10年…。お互いに話すことができない同士だが、E子さんには最愛の友がいる。車椅子使用のK子さんだ。K子さんからEさんに方に寄っていくのは不可能だから、自然とEさんがKさんに近づくことになる。が、もちろん会話のない二人だから、なにをどのようにして心を通わせているかわからないのだが、Kさんが誤嚥性肺炎などで入院でもすれば、「具合はどうなのか？」「いつ退院なのか？」「私にできることはないのか？」などと決まって発熱や怒りの発信でそれを伝えるE子さんだった。

旅行の相手はいつも写真選択でK子さん、パフェなどを一緒に食べる女子会メンバーの選択でもEさんのお相手はK子さんだった。

入院時のお見舞いの鶴の折り紙は、気持ちを伝える手紙が職員との共同制作で添えられ、病院に届けられた。女子会のお誘いも、職員との共同制作で招待状が作られ届けられ、いつでも「ありがとう」の言葉とともに彼女にKさんから返事が届いた。

そして、彼女にはとても大切な相棒がもう一つ（一人？）できた。

あるとき、買い物の選択で選んだものは、なぜか、あのセサミストリートの人気キャラクターの「エルモ」だった。彼女は昔から「おにんぎょさん」と小さくつぶやきながら人形を持ち歩くのだが、「なんだか最近昔の人形は持ち歩かないよね」という話になって、持ち歩きたくなるような新しいぬいぐるみ探しが始まっていたところだった。「エルモ」なんかどう？って思いついた職員も気が利いているが、なんだかその選択の理由もわからないうちに、居室には三つ、四つとエルモのぬいぐるみが溢れるようになった。そして、彼女はニコニコしながらそのぬいぐるみを大切に持ち歩いた。

【解説】

このように肌身離さず持ち歩くグッズを精神分析では「移行対象」と言います。多くは乳幼児期に出現する現象で、母親から離れていかななくてはならない寂しさを埋めるために、タオル、ぬいぐるみ、人形、毛布などが使用され、肌身離さず持っているグッズとなります。柔らかい、肌触りが良いなどが甘えの気持ちを埋め愛着対象となります。知的障がい、自閉症の場合は、乳幼児期にかかわらず出現し、その対象物になる範囲は極めて広くなります。ペットボトル、石、葉袋、ご飯粒、紐、服・等々、父親イメージや母親イメージを連想させる全てが移行対象となり得ます。両親からの分離の寂しさを埋める支援が功を奏せば、そのグッズは持ち歩く必要が無くなるでしょう。



まずは、廊下で寝ている彼女に毛布を掛けてもすぐには起きなくなった。そして、寝る場所が、廊下から夜勤者がいる職員室へ移っていった。そして、職員の誘われるまま居室へ行き、布団の上に寝るようになった。いつしか頭は床につき、布団につくようになった。

緊張した固い身体には、床が寝心地が良いのだろう。緊張した身体は、タオルケットや毛布のような柔らかい接触感を拒否するのだろう。しかし、緩んだ身体には、柔らかい布団が必要だし、柔らかい掛け布団が必要なのだろう。

彼女は、今、エルモのシーツにくるまれて、頭を布団につけて居室で寝ている。あれほど緊張でガチガチだった身体が、K子さんという親愛なる友、エルモという相棒を得て、心通わせることができ緩んだのである。お心主義の支援を始めて20年…。父、母が亡くなって10年…。まだまだ登らなくてはならない幸せの階段がある。

WELCOME TO SATORU WORLD

障がい者支援施設明星学園における心のケア

<http://myojo-satoru.life.coocan.jp>

Facebook : <https://www.facebook.com/satoru.miyashita.1>